Androidに見る現代的なオープンソース開発プロジェクト運営

○八田真行（Masayuki Hatta）
Keywords：オープンソース、ソフトウェア開発、Android、オープン・イノベーション

１　目的

本研究の目的は、2003年より開発が始まり、現在ではスマートフォン等のオペレーティング・システムとして広く利用されているAndroidに関し、技術的・経済的側面ではなく、開発の進め方やプロジェクトとしてのガバナンスといった社会的側面から分析することである。Androidに関しては、オープンソース・ソフトウェア開発の代表的な成功例とされる一方、そもそもオープンソースではないと言われることすらある（Vaughan-Nichols 2014）。このような混乱に、整理された視座を与えることを目的とする。

２　方法

本研究の調査・分析方法は、基本的に事例研究である。Androidの開発が実際にどのように進められているのか、主に公開情報や開発関連データから明らかにした。

３　結果

調査・分析の結果、単純にソースコードの量としても巨大で、またLinuxカーネルを始めとした外部のソフトウェアを多く包含しているため、結果として自社以外のステークホルダーが多く関わっているという意味でも大規模で複雑なプロジェクトであるAndroidを、Googleがどのように運営しているかを明らかにした。具体的には、オープンソース・ソフトウェア・ライセンスでソースコードを公開するという前提の下で、オープンソース部分と非オープンソース部分の分離（オープンコア戦略）、ソースコード公開のタイミング、リリースサイクルの管理、団体の設立と標準化、商標など著作権以外の法的権利の主張など様々な手法を駆使することで、Google が直接的な雇用関係が無い開発者も含めた開発プロジェクトの主導権をどのように握り、オープン・イノベーションを実現しているのかを明らかにした。

４　結論

以上を踏まえ、本研究では、オープンソースに関して分析する際の検討枠組として、「法的状態としてのオープンソース」と「開発形態としてのオープンソース」の分離を提案する。誤解を恐れず簡単に言ってしまえば、法的状態としてはオープンソースだが、開発形態としてはオープンソースではないプロジェクトとがあり得るということである。Raymond (1997)が「伽藍とバザール」で描いたような従来の牧歌的・自己組織的なプロジェクト像ではなく、入念に設計され、より洗練された現代的なオープンソース・プロジェクトのアーキタイプとしてAndroidを位置づけた。

【主要参考文献】

Vaughan-Nichols, S. (2014). Debunking four myths about Android, Google, and Open-Source | ZDNet. *ZDNet*.